

「Tenjin Toya Clinic」の院長・副院長に聞く専門科が連携するメリットについて

整形外科、リハビリテーション科、再生医療、皮膚科、美容皮膚科を併設した医療施設である「Tenjin Toya Clinic」では、専門科の特性を活かしつつ、診療科間での迅速な連携も実現しています。専門科が複合することでクリニックを受診する側にとどのようなメリットがあるのか、院長の遠矢政和医師と副院長の遠矢麻衣子医師に伺いました。

まず、整形外科と皮膚科の連携は、どのような場面で発生するのでしょうか。

【遠矢政和院長(以下、院長)】整形外科は、痛みや痺れ、スポーツによるケガなど全身を幅広く診る診療科であり、皮膚科も同様に全身の診療を行います。どちらの診療科も小さなお子様からご年配の方まで幅広い世代の患者様に受診いただいています。そんな中で、ケガの治療で整形外科を受診された方が、同じクリニック内に皮膚科もあることを知ってお肌の悩みなどを相談されるというケースがあります。また、逆も然りで、皮膚科に来られた方が整形外科の症状と一緒に診てほしいという場合もありますね。他にも、関節リウマチやその他の膠原病などでは、整形外科と皮膚科の症状がオーバーラップする場面も多々あります。そのような時に同じクリニック内で両科がスピード感を持って横で連携できるのは、当院の強みの一つです。

【遠矢麻衣子副院長(以下、副院長)】同感です。解剖学的にも皮膚科と整形外科との親和性は高いと思います。当院では、皮膚より深部の筋肉や骨の評価も必要と考えられる場合には、都度整形外科と相談しながら治療にあたっていきます。患者様にとって、皮膚科と整形外科が一つの医院で完結できるということは大きなメリットだと考えています。

一人ひとりの「オーダーメイド治療」もこの医院の特長の一つですが、それをするためにどんなアプローチをされていますか。



【院長】まず何よりも大切なのは正確に診断することです。同じ疾患であっても一人ひとり症状は異なりますし、同じ症状でも原因は異なる場合があります。患者様一人ひとりにしっかりと向き合い、診察・検査を行い、何が問題なのかをきちんと洗い出すように心がけています。見つけ出した問題点をどのように解決していくか、専属のリハビリスタッフ(理学療法士)も含めて話し合いを行いながら治療を進めていきます。ただ「薬や湿布を出して終わり」の対症療法ではなく、「根本からの解決」に向けて患者様とスタッフが共に歩むことが大切です。患者様と最終的な目標を共有しながら それに向けて治療を行っていくことが「オーダーメイド治療」になると考えています。

再生医療をこちらに導入された背景やその安全性についても教えてください。

【院長】世界的に見ても、日本は「再生医療」の臨床応用が進んでいる国の一つです。私自身、大学院や留学中(スタンフォード大学)に、軟骨や幹細胞を使った研究を行い、手術以外の新しい治療法の開発に取り組んできました。現在の日本の再生医療は、ただ治療を行うだけでその後の適切な評価が行われていないことも多く、世界から批判されることもあります。実際に研究をしていた立場からしたら「こういう病態に効果を発揮する」という自信もあり、医学的根拠(エビデンス)に基づいた再生医療を提供・評価し、適切に発信していきたいという思いから当院での導入を決断しました。安全性に関しては、当院で行う治療は全て「認定再生医療等委員会」での承認

を経て、厚生労働省へ届出・受理されたものです。当院では患者様ご自身の血液や脂肪組織を処理して治療を行います。当院は特定細胞加工物製造手続きも届出・受理されており、院内完結で治療を行えることも特徴です。またご自身の細胞を使った治療ですので、大きな副作用は起こりにくい治療と言われています。

具体的に再生医療とはどのような治療で、整形外科治療とどのように連携するのでしょうか。

【院長】再生医療の主な役割は「関節内」の炎症を抑制したり組織を修復したりすることです。しかし関節の中が修復しても、筋肉などの関節外の組織が弱く症状が再燃してしまいます。関節外の治療のメインはリハビリ(運動療法)で、再生医療の役割はリハビリ(運動療法)で、再生医療の効果が得られることが医学的にも分かってきています。当院はトレーニングマシンも完備しており、院内でのリハビリはもちろん、自宅での運動・トレーニング指導も大切にしており、患者様のより良い治療結果に繋げられるようスタッフ一同取り組んでいます。再生医療だけを行うのではなく、整形外科・リハビリテーションとのコラボレーションが重要だと考えています。

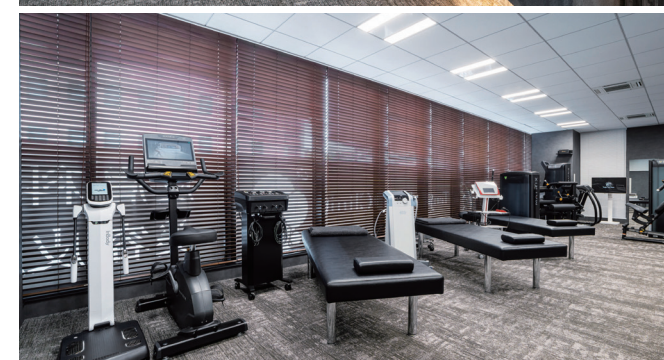
一方、皮膚科では「お肌のかかりつけ医」としての役割を意識されているとのことですが、これはどのような考えでしょうか。

【副院長】皮膚科専門医としての知識と診療経験をもとに、赤ちゃんからご年配の方まで、ニキビ

やじんましん、いぼ、たこなどのよくみられる皮膚疾患から長年のお肌のお悩みにも丁寧に対応させていただきます。私自身、3児の母であり、また小児皮膚科での診療経験も豊富ですので、お子様にもリラックスしてご受診いただけるよう、配慮して診療を行なっております。ご家族皆様の皮膚のお悩みのかかりつけ医として、なんでもお気軽にご相談ください。

美容皮膚科では「可能な限りダウンタイムのない施術」を心がけられているとのことですが、それはどんな理由からなのでしょうか。

【副院長】当院美容皮膚科では、痛みやダウンタイムに配慮した施術を心がけております。「美は1日にしてならず」という言葉がありますが、美容施術は1回受けて終わりではありません。治療効果を判定し、ご自身に合った施術を継続していくことが重要ですが、痛みが強かったり、ダウンタイムが長い施術は、なかなか継続が難しいという方も多いと思います。当院に導入している施術は全て、私自身が実際に受けてみて効果を実感し、継続していきたいと思ったものです。切らない・痛くない、たるみ治療「ザーフ」や、ダウンタイムなしの赤み・しみ治療「ノーリス」、浴びるだけの美肌・発毛治療「ヒーライト2」、針を刺さない高浸透美肌管理「メソナ」などを取り揃えております。今後もさらに治療のオプションを増やし、皆様のお肌のお悩みに幅広く対応してまいります。整形外科に併設しており、美容皮膚科が初めての方や男性も受診しやすい環境となっておりますので、ぜひお気軽にご相談ください。



市営地下鉄七隈線「天神南」駅から徒歩1分という好立地も魅力のこちらのクリニックには、体組成測定器「InBody」やジョンソンヘルステック社の「MATRIX」などを備えたパーソナルトレーニングルームを完備。また、ダークグレーを基調にした院内は落ち着いた雰囲気、診療や支払いの待ち時間もゆとりと過ごすことができる。美容皮膚科では、IPL治療器「Nordlys(ノーリス)」や高周波(RF)治療器の「XERF(ザーフ)」といったダウンタイムが短く、施術時に強い痛みを伴わない機器を導入。低刺激で効果的なエイジングケアを目指している。

3つのセクションで悩みにお答えします



整形外科 / リハビリテーション科



再生医療



皮膚科 / 美容皮膚科

「痛みからの解放と健康寿命の延伸」をスローガンに掲げる。院長自身が「整形外科に行っても湿布・痛み止め・電気をやられるだけ」という患者の声を問題視しており、痛みの根本原因を解決するための治療を重視。整形外科専門医による診断と、経験豊富な理学療法士による運動療法を密接に連携させ、最適な治療計画を立案・実行する。

「手術以外の選択肢」として、細胞治療で未来の健康を切り開くことを目指す。既存の保存療法や手術の代替ではなく、早期から正しく介入・併用することで最大限の効果を得られる治療法と位置づけている。院長自身のスタンフォード大学での幹細胞研究経験が、この分野における専門性と信頼性の基盤となっている。

保険診療の皮膚科では、「あなたのお肌のかかりつけ医」に掲げ、赤ちゃんからご年配の方まであらゆる世代の皮膚トラブルに対応する地域密着型の診療を実現。一方自由診療となる美容皮膚科は、「健康的なお肌作りとエイジングケア」を目的とし、「可能な限りダウンタイムのない施術」を軸に美容クリニックが初めての方や男性でも通いやすい環境を目指す。

Clinic

一人ひとりに寄り添った“オーダーメイド医療”で地域の健康と美容をトータルサポート



Tenjin Toya Clinic
福岡市中央区渡辺通5-24-32
FPG links TENJIN MINAMI 5F
TEL.092-401-7000
[診療時間] 9:30~17:30
[休診日] 土曜・日曜・祝日(臨時診療日あり)



とよや まさかず
院長 遠矢 政和

【略歴】
2005年(平成17年):私立ラ・サール高校卒業
2012年(平成24年):九州大学医学部医学科卒業
2021年(令和3年):九州大学整形外科 医学博士 学位取得
2021年(令和3年):米国スタンフォード大学 整形外科 留学
2025年(令和7年):Tenjin Toya Clinic 開業



とよや まいこ
副院長 遠矢 麻衣子

【略歴】
2010年(平成22年):佐賀大学医学部医学科卒業
2012年(平成24年):九州大学病院初期臨床研修修了、九州大学皮膚科学講座入局
以後、福岡市立こども病院皮膚科ほか関連病院皮膚科勤務、
また福岡市内の複数のクリニックにて美容皮膚科診療に従事
2025年(令和7年):Tenjin Toya Clinic 副院長、皮膚科・美容皮膚科部門 担当医